

小泉八雲他著「最終講義—学究の極み—」角川ソフィア文庫、KADOKAWA 2024 年 5 月 25 日刊  
を読む

1. (1) 大学を卒業すると、みなさんのほとんどは非常に多くの時間を奪いそうな、ある種の職業に就くことになるであろう。  
(2) こうした環境の下では、文学を愛する多くの若者は愚かにも観念して、この方面での楽しみをやめにしてしまう。  
(3) そうした若い学究たちは、もはや詩や物語や芝居を書いたりする時間がない——ましてや、個人的な勉強をするための時間さえあまりない、と考えてしまうと思う。
2. (1) しかし、これははなはだ大きな誤りである。  
(2) おそらく詩という唯一の例外を除いて、われわれに新しい文学を一番よく提供してくれるのは、忙しい人々である、と私は考えている。  
(3) 偉大な詩を生み出すには暇が必要だし、孤独な瞑想にふけるにはもっと多くの時間を要するであろう。  
(4) だが、他の文学部門においては、西洋の大部分の文人は非常に忙しい人々であったし、現在でもそうであると思っている。
3. (1) ある者は官庁に、またある者は郵便局に、さらにまたある者は陸軍や海軍に勤めている。  
(2) 陸・海軍の将校がいかに忙しい思いをさせられているのか、みなさんは知っているであろう。  
(3) そういった忙しい人たちの中に、銀行家、裁判官、領事、知事、さらには数はごくわずかだが、ビジネスにたずさわっている者もいる。
4. (1) 実際のところ、ただ立派な文学作品を生むことによって生活の糧を得ることは、誰しもほとんど不可能なことであろう。  
(2) 文学者はほとんどの場合、職業を持っていないなければならない。  
(3) 年々、この必要性は増大している。  
(4) しかし、文学作品の創作原理は一時にたくさんの仕事をしないで、規則的な期間をおいて、少しずつ仕事を続けることである。
4. (1) みなさんの誰もが、1 日のうち 20 分か 30 分を文学のために割けないほど忙しいとは思われない。  
(2) たとえみなさんが、1 日のうち 10 分しか割けないとしても、1 年の終わりには非常に多量の時間になると思う。

5. (1)別の言い方をしてみよう——毎日、5行ずつ文学作品を書くことはできないだろうか。  
(2)もしみなさんにできるのであれば、忙しさの問題は、たちまちのうちに解消してしまうことであろう。  
(3)365に5を掛けてみよう。  
(4)12ヵ月も経てば、それはかなり膨大な仕事量になることであろう。  
(5)毎日2、30分ずつ書くことを心に決めればどんなによいことか。
6. (1)もし、みなさんのうちで心から文学を愛する者がいるなら、この私のささやかな言葉を忘れないようにしていただきたい。  
(2)そして、みなさんがたとえ毎日10分か15分しか時間がないにしても、自分自身のことを忙しさのあまりほんのわずかしら勉強できないなどと思わないようにしていただきたいと思うのである。
7. それでは、みなさん、さようなら。

— Farewell Address (Interpretations of Literature, II, 1915)

1903年(明治36)東京帝国大学 訳／池田雅之

#### <コメント>

引用は、小泉八雲(ラフカディオ・ハーン)先生が、1903年(明治36年)に東京帝国大学文学部で行った最終講義。文学部の学生、教員、国民に向けて行った最終講義。

文学を志し、文学を大学はじめ様々なところで学んだ者は、大学や学校を卒業した後も文学に親しみ、作品を自らの手で作り続けるようにとの「教え」。国語を教える先生は、是非、自らの教え子たちにこのことをお伝えください。

2025年11月13日